

『関西学院考古』創刊の頃

岡 野 慶 隆

私の自宅の本棚には、『関西学院考古』のバックナンバーがそろっている。とくに机脇の手の届く本棚には、これまで私が執筆した調査報告書や論文等を並べているが、同誌もその中に入っている。今回第10号が発行されると聞き、久々に創刊号、第2号、第3号を開いてみた。

創刊号は、ガリ版刷りで1973年3月に出されたものである。後年、同誌が広く読まれるようになって「創刊号は入手できないものか」という問い合わせがあり困った記憶がある。内容が、研究会内の学習会用資料集にすぎなかったからである。当時私は2回生で、研究会では先輩にあたる橋爪康至さんのお世話で尼崎市の遺物整理の手伝いに小学校内の収蔵庫に通っていた。すぐ横が放課後の児童育成の教室で、創刊号はそこにあった謄写版印刷機を借りて刷った記憶がある。なぜ、学習会用資料が『関学考古』創刊号なのか、今でもよくわからないが、3回生の折井千枝子さんによる命名であったように思われる。当時、研究会の活動は行政の発掘調査の手伝いが多く、これでよいのかという議論があったが、学術研究団体として本来の研究活動やその成果の発表の場として研究会誌の発行を望んでいたのではなかろうか。あとから思えば、創刊号は内容よりもその願望や意思表示に意義があったようである。

創刊号を尊重して第2号と名付けられた研究会誌は、1975年6月に出された。私が大学院1年の時で、すでに研究会を引退していた。同号は手書きの原稿をファックスで原紙を切り、輪転機で印刷したものである。私の同学年の木本秀樹君は日本史研究室の助手のようなことをしていたが、考古学研究会の元メンバーだったのでお願いし、内緒で文学部事務室の印刷機で印刷してもらった記憶がある。内容は、前年に行った関学構内古墳の測量調査報告や上ヶ原古墳群の復元考察を前年度研究会長であった北山勇君と岩橋信幸君、小島周二君等が中心となってまとめたものである。創刊号に比べると、格段に学術的な冊子となっている。そのせいか、文学部玄関前で会員各自ができた同誌を胸の前に掲げた誇らしげな記念写真があったが、今でも部室に残されているのだろうか。

第3号は、その次の年1976年8月に出された。当時研究会長であった坂井秀弥君が中心となりまとめた活字印刷による本格的な冊子である。内容もこれまで研究会で行ってきた関学構内古墳を含む仁川流域の古墳群の測量報告や遺物実測、さらには考察が載せられており、装丁、内容ともに実質的な創刊号となっている。私たち卒業生も頁を与えていただいたが、「Ⅲ考察とまとめーCその他の問題点」の執筆者名の「双岡」は、現在尼崎市教育委員会勤務の岡田務さんと私の共同執筆のペンネームである。また、その年の3月、永年研究会の顧問をしていたいた武藤誠先生がご退任されている。同誌をその記念として、研究会より先生に献呈させていただいたが、非常にお喜びであったことが思い出される。

これら創刊号から第3号は、いずれの号も「創刊号」といってもよいものであるが、実質的な

創刊におよそ3年の期間と3冊の発行が費やされたのは、やはり研究会誌の発行は簡単ではなかったからであろう。学術的な研究会活動の充実と成果に、図面・原稿作成や印刷発行に関する知識が加わり、さらにこれらをなし得る会のメンバーがそろわなければ研究会誌は発行できない。また、学生による研究会の宿命で、年と共に会員は卒業して入れ替わってしまい、一度途絶えた研究活動や会誌の発行体制を再度始めるのはなかなか困難である。そういう意味で、前号から10数年のブランクがある今回の第10号の発行は、一種の「創刊号」といってもよいのではなかろうか。ただ、一卒業生としての勝手な思い入れを許していただくならば、およそ30年前の研究会員が『関西学院考古』という研究会誌を創刊し、その後9号までの発行があったという事実は、現研究会員が第10号を出すきっかけとなり、多少の勇気を与えたに違いないものと思いたい。その意味で、ガリ版刷りの学習会用資料にすぎない「創刊号」のもつ役割は、意外と大きなものであ

